

## 専攻長挨拶

生物・環境工学専攻長 田中 忠次

我々の学問分野は明治33年(1900年)に上野英三郎先生が農学第2講座を分担されたときに始まった。そして農業工学講座が上野英三郎先生を担任教授として農学科内に発足したのは明治44年(1911年)のことであった。上野教授は西欧の工学の方法論に基づいて我が国の農業工学の確立に努め、「農業工学教科書」(明治36年)はじめ多数の教科書を出版された。以来我々の学問分野は農業土木学から、農業工学、生物・環境工学へと拡大し、発展してきている。現在、生物・環境工学専攻は、農地環境工学、水利環境工学、環境地水学、生物環境工学、生物機械工学、生物プロセス工学、生物環境情報工学の7講座の陣容となっている。

ここで、本専攻のあゆみを振り返ってみたい。大正14年(1925年)に農学科の中に農業土木学専修が認められ、体系的な農業土木学の教育がここに始まった。農業工学講座は農業工学第一講座と改称され、現在の農地環境工学講座に至っている。同年に農業工学第二講座が新設されたが、長く空席のままおかれた。昭和10年(1935年)には農業土木学専修から農業土木学科への昇格が認められ、予算問題も解決して第二講座に教官が就任し、実質の講座開設となった。この第二講座は現在の水利環境工学講座に至っている。昭和21(1946年)年農業工学第三講座が設立され、製塩工学及び海水利用工学を担当した。本講座は現在の生物環境工学講座に至っている。翌22年に農業土木学科の中に農業機械学講座の開設が認められた。本講座は現在の生物機械工学に至っている。翌23年に農業工学科に名称が変更され、カリキュラムも改訂されている。昭和24年(1949年)に学制改革が実施され、専門教育が3年から2年に変更されたことに伴い、昭和25年には農業工学科のカリキュラムも大幅に改訂された。さらに昭和28年には新制の大学院が発足している。昭和37年(1962年)には農業土木学第四講座が設立され、本講座は現在の環境地水学講座に至っている。続いて翌38年には農産機械学講座設立され、本講座は現在の生物プロセス工学講座に至っている。昭和39年(1964年)には農業工学科に農業土木学専修および農業機械学専修が発足し、ここに二専修のカリキュラムが成立した。

平成8年(1996年)東京大学の大学院重点化により、農学部農業工学科は大学院講座化され、農学生命科学研究科生物・環境工学専攻に組織変更された。それに伴い、学部は課程化され、旧来の農業工学を学ぶ学生は生物環境科学課程の中の地域環境工学専修と生物生産科学課程の中の生物システム工学専修という異なる課程、専修に分かれて在籍することになった。教育上また大学院との関連からは二つの専修の学生は6類として括られ、大学院では生物・環境工学専攻に在籍するというものである。生物環境情報工学講座がこの時に設立されている。

上記の経過をたどり、現在、本専攻には21名の教官が在籍しており、助教授ポストの1名を除いてすべて定員が充足された状況にある。また20世紀最後の年である本年は、駒場から進学生32名を迎えており、かつてない充実期に入りつつあると言える。さて、高度な科学技術の発展のために大学院重点化が行われ、数年を経て、現在農学部及び農学生命科学研究科について、外部評価としての「農学評価」の実施準備が進められている。その中で議論された本専攻における最近の教育・研究目標の要点は、「我々の分野は人口問題・食糧問題・環境問題・エネルギー問題など、21世紀の人類にとって最も重要な課題に立ち向かう分野であり、水と緑と大地に関わる地域複合空間の創造に関わる分野、豊かで安全な食糧供給と環境保全の両立を図る分野において教育研究を進める」というものである。外部評価においては研究業績、学部・大学院教育、社会的・国際的貢献など多くの項目が調査対象となっている。本専攻には研究会議を通じて全学的に見ても先駆的な研究業績の調査などが実施されてきた30年を超える実績がある。今回の外部評価などいかなる調査にも対応し得る素地は出来上がっていることは言うまでもない。この他、本専攻に関わる最近の動きでは、国際化に関わる事項が特筆すべきであろう。研究、大学院教育において国際交流が大きく進展しており、また国際的な技術者教育の動きの中では、日本技術者教育認定制度(JABEE)の実施が日程に上ってきている。